世界文学全集－第1巻－少年と丁氏の生きる姿

岐阜県郡上郡大和村立北小学校1年6組

血液型AB　　さとうきようすけ

1章－地獄－明から暗へつき落とされた少年

昭和53年3月27日夕刻のことである。

「もしもし，宝谷さんのお宅ですか」

「はい，そうですが」

「一夫さんいらっしゃいますか。」

「さっき出かけたんですが」その時，1人の少年の脳裏には，もしかしてという不吉な予感が，百メートル9秒9の猛スピードで走った。そうだそんなばかなことはないという考えも10秒フラットのスピードで走った。しかし，結果は明らかであった。10秒フラットでは，もう世間には通用しないのである。それでも，ドーピングで薬が検出されれば，勝てるという望みも捨てなかった。恐る々聞いた。

「どこへ出かけたんですか」この少年にとって人生を左右する問いに，最初に入ってきた言葉は，

「し」であった。少年にとっては，「し」というなんということもないただの言葉が，あの荒波の足摺岬に立った時に思い出さなくてはならない「死」そのものであった。1人のけがれなき少年は，灯台を横目に見ながら，何もすがるもののない自分に，人生の無情を感じながら，かすんだ水平線の上をいまにもひっくり返りそうな

ポンポン舟を見つめていた。と，同時に，今にもくずれ落ちそうな岩の上に立てば，眼下に，大きな波が岩にぶつかり，くだけて出来る白波が死とは正反対にさわやかに広がっているのが見えたはずである。しかし，少年は，まな板の上の目ざしのように覚悟を決めていたのか，後姿は自信に満ち足りていた。次に入ってきた言葉は，「こ」であった。電話のむこうから聞えてきた「しこ」という言葉は，あたかも「自己」「事故」と聞こえて，そこにただよった空気は，背中に当てられた120円くらいのナイフのように，切れ味こそ悪いが1人の人間を殺すには充分であった。自己の事故と連想すると，頭のてっぺんに5寸くぎを打ち込まれたようであった。最後の言葉は，そうまさに決定的となった言葉は，

「く」であった。少年の耳には「苦」とひびいたことであろう。一般には，南国の楽園を想像する「しこく」という言葉が，1人の少年には，「地獄」としか思えなかったであろう。ついに少年の29cmの足は，岩を離れたのであった。

少年の人生は，どこでどう間違ったのか1日多かったわけである。

2章ー立ち直りー必死に立ち上ろうとするひたむきな努力

少年は，海面へすい込まれる前にも，自分のすべきことを忘れなかった。グループリーダーであるT氏へ電話をかけた。ここで少し説明を加えておく。東京の宝谷氏，岐阜の少年，大阪のT氏は，新

大阪発23:21発の急行鵜羽に乗り合わせて，四国で待つ小川氏，鈴木氏に合流する予定であったが，少年は，出発日の前日に宝谷氏へ電話をしたつもりが，その日が出発日だったのである。それでT氏へ連絡したのである。T氏は，30分あれば新大阪へ行けるが，少年は6時間かかるので，どうしてもその日の急行鵜羽には間に合わず，宝谷氏は，もう家を出ていたわけである。ここで，大阪のT氏と匿名にしたのは，後に白い目で見られるようなことになるため，傷つけないようにという筆者のT氏への暖かい配慮からである。

少年は，T氏に次の日でいいから四国へ来るようにとなだめられて気を取りもどし，未来ある自分の人生をそまつにしないことを悟り，一度縁を切った大地へせりいっぱいへばりついて，暗い過去を背負いながらもたくましく生きて行ったのである。そんな少年に，幸か不幸か，宝谷氏が新幹線の事故で出発出来ないため，出発日が1日遅れるという連絡が入ったのは，より子の寝る時間を2時間ほど過ぎていた。

3章 下心 立ち直った少年にも下心があった

次の日の昼ごろ，片方に自転車，もう片方には，さくを持った少年は，明日へ向って大きくはばたいていったのである。新大阪に，着いたのは夕刻6時少し回ったころで，発車まで5時間ほどあったのである。ここにも1人の少年の夢と希望のひとつの現われを見る

ことができる。しかし，片手に持たれたはっさくで，宝谷氏及びT氏に今までのことを少しでも許してもらおうという下心があろうとは，誰一人知るよしもなかった。宝谷氏は，そのことを知ってか，はたまた単純なのか，はっさくを食べたのであるが，T氏は，みかん恐怖症であるため，見向きもしなかった。ここで，はっさくを食えばT氏の運命も変っていたであろうに。

4章ーあだになった怠慢ー苦しみにうちひしがれるT氏

世間の信望を一心の集めた少年が，南国の楽園中村駅に立った時は，もうすでに日は高く，寝不足の目には強すぎる日ざしであった。これから南国の地を楽しもうという時に，この少年とは反対に，また完全にその気になれない人がいた。あえて匿名のT氏である。自分の自転車を東京から四国まで運ぶのをめんどくさがったT氏に，天のさばきがあるのは当然である。古今東西，サイクリング部員がこれほどまでに怠慢だったのは記録にないことである。最初はT氏だって，まさか着いてないことはないだろうと思い込もうという，又，着いていなくては他の人に申し訳ないというけなげな心使いが動作のいたる所に表われていたのは，今思うといじらしいことだ。T氏の自転車は，その日のうちには所在が全くつかめなかった。T氏のそのための電話をかけたり，運送会社まで行ってみたりという涙ぐましい努力もむくわれなかったのである。

5章―悲しみの横顔―ついにT氏は自分の自転車が見れなかった

1日中中村駅に居てもしかたのないT氏を除く4人は，とにかく行動を起こした。宿毛までの24キロは，リーダーであるT氏のいないグループであり，T氏の自転車を案ずるというヒューマニズムあふれる気持ちとで，長く長く感じました。心のかたすみには，T氏を責める気持ちが，ちゃんとありました。宿毛，足摺で一泊ずつして，中村駅へ帰ってきてもなんとなくすっきりしませんでした。中村駅でT氏と待ち合わせていたので，足摺のユースは早めに出発しましたが，4人が着いた時にはまだいつもは目立つT氏の姿はありませんでした。それから2時間くらいたっていたでしょうか。ナップサックを背負い，両手をヤッケのポケットにつっ込んで，遠くの交差点を曲ろうとしている1つの物体がありました。そう，少しうつ向き加減にゆっくりと歩いているT氏です。紛れもなくT氏です。悲しみが，全身にみなぎっています。いつもの姿よりも2倍も，3倍も小さく見えます。その姿がしだいに近づいてきて，目の前でふと目をそらしたT氏の横顔が印象的でした。